

医師は語る

謹賀新年



医療法人社団健翔会
堀口医院 理事長
堀口 裕 先生

皆様、今年もどうぞ宜しくお願い致します。いつも思うことですが、人生を存分に楽しむためには常に健康でいなければなりません。もし人生が一度かぎりとするならば、一日、一時間、一分、一秒がおいしいです。病気で寝込んでなんかいられません。どうか皆さん、還元電子治療をあてて今年も健康で過ごしましょう！

今や癌の時代

さて、健康で過ごせるように十分注意していても、やはり病気になることがあります。とくに癌は大勢の人がなっています。私が学生の頃、教授方のお話を聴いていたら、癌は間もなく治せる病気だと確信しました。でも、どうしたことでしょう？今や癌の時代です。進行してしまつと、まったくのお手上げ状態です。治療（ちゆ）などほど遠い話です。可能なら手術や放射線を施し、抗がん剤を使って、また使って、さらに使つて、それでも治らないのです。どういふことでしょうか？

癌治療への勘違い

私たちは勘違いをしているのです。手術をしたら癌は無くなりません。放射線をしたら癌が、消えるか小さくなります。抗がん剤をしても癌は消えるか小さくなります。ここが勘違いの原点です。いずれかの治療をして癌が消えるか小さくなつても、また再発、転移する例が多いことから、それらの治療は治療（ちゆ）するものではないということなのです。では何なのか？それらは治療を助けるものです。

治療を手助けする治療

簡単な例を挙げます。①ちよつとした擦り傷や切り傷は、放つておいても治ります。②しかし深い傷は化膿がひどくて治りません。ときに命を落とします。そこで何度も患部の消毒を繰り返し、化膿止めや炎症止めを服用します。そうすれば治療（ちゆ）します。①から、私たちに言います）が備わっていることが分かります。そして②から、消毒剤や化膿止めや炎症止めを使うと、命を落とさずに治ることが分かります。このときの消毒剤や化膿止めや炎症止めこそが、治療を助けるものです。病気や怪我を治す自分の力は、無限ではありません。限界があります。

す。そこでちよつとだけ手助けするものを与えます。そうすれば、あとは自分の力（自己防御力）だけで治すことができます。

癌治療の定石

癌もまったく同じことです。癌を治療させるためには、手助けする治療を与えながら自分の力を引き出すことが定石なはずで、ところが患者さんのなかには、癌の治療には抗がん剤が必要、そこから転じて抗がん剤が癌を治療させる、そう思っています。しかしそのような考えに至るには、お医者さん側の説明にも一因があります。たとえよく効く抗がん剤であっても、患者さん側に治る力が無いのなら、癌が治ることは決してありません。

癌患者さんの問題点

最後に、癌を治療するにあたり患者さん側の問題点を指摘します。病気は注意していても起こるものです。しかし病気になったのは、あきらかに自分が原因です。その点を悔い改める人は、ほとんどいません。癌患者さんの多くは、癌治療のことしか考えません。「他の癌の人は、この抗がん剤がよく効くというのに、自分にはさっぱり効かない、なんでや？」「私の担当医ときたら、抗がん剤の効き具合について、さつ

ぱり説明してくれないし、まともに診察もしない。」不平不満が多すぎるように感じます。癌に至つた自分への反省はないのです。また、抗がん剤治療がとても苦しくて、抗がん剤を中止するなら、それは自分の判断と責任で行うべきです。もし担当医が「それならば、私のできることはもうないから、来なくていいよ」と言われたとしても、それは当然のことです。自分が招いた病気です。自分が方向を決めなければなりません。もともと癌ができたのは、自分で癌を抑える力、すなわち自己防御力が慢性的に低下していた、それだけです。徹底的に自己防御力の回復に努めてください。応援しています。



【堀口裕先生プロフィール】

北海道出身。川崎医科大学医学部卒業。一九九二年香川県坂出市で医療法人社団健翔会堀口医院を開院、現在は理事長兼院長を務める。長年に亘り、空気中のネガティブイオンに関する生理的作用を研究、独自に開発された細胞内検査と還元電子療法を駆使した、根元（ねもと）治療という新しい医療を推進し、国内外で活躍している。